

実施報告書・アンケートのまとめ（抜粋）

A. 意識の変化、感想等

- 学生自身の意識の変化、感想等
- 認知度について
- 視点について
- 将来の仕事の関連について
- 保護者、支援について
- 地域社会との関係について
- 施設について
- その他

B. 若者への広報啓発の工夫

- 全般的な配慮
- 保護者・子どもへの配慮
- 施設関係
- 工夫全般

C. 創意工夫した取組

- 全般
- 連携
- ソーシャルネットワーク、報道等

A. 意識の変化、感想等

A. 意識の変化、感想等 – 学生自身の意識の変化、感想等

- ・児童虐待防止啓発月間というものがあることを知った。
- ・今日の虐待についての現状を理解することができた。
- ・児童福祉法第により、通告義務があることを知った。
- ・児童虐待防止への意識がさらに向上した。
- ・児童虐待についての情報に敏感になった。
- ・「命のかけがえのなさ」を知る貴重な学習機会となった。
- ・授業では虐待という言葉を知っていたが、事前の勉強会で内容を深く理解することができた。
- ・虐待の対策は様々な機関で行われているということが分かった。
- ・国の取り組みが意外になされていることを知った。
- ・声かけのような小さなことから始めることが大事だと思うようになった。
- ・自分たちが親になった時のことを考えるようになった。将来について考える機会となった。
- ・親になることが怖いという気持ちも芽生えたとし、意識しない言動が虐待になると考えた。
- ・虐待とは何か、現在の実態はどうか等、知らないことは怖いと思う。
- ・子どもが好きだけでは、子育てはできないと思った。
- ・日頃から、こうした取り組みをいろいろな場所で行うことも大切であると感じた。
- ・現在（運動後3ヶ月）でもオレンジリボンをバッグにつけている学生がいる。
- ・学生にとって、社会の現実を理解する良い機会になった。
- ・「命のかけがえのなさ」を知る貴重な学習機会となった。
- ・自身が児童虐待について勉強して知るだけでなく、一般に浸透させていくことが必要である。
- ・若い世代が考えていく必要があると思う。
- ・中学生・高校生などと＜対話＞をすることが運動の質の向上につながると感じた。
- ・私たちがもっと意識して児童虐待防止に関わることで変わってくるものがあると感じた。
- ・今までは虐待という事実だけをなぞって問題としてきたが、その背景にある問題にまで考えを深めることができるようになった。
- ・つい叩いてしまうような虐待のケースについても、関心を持つことの大切さを広めていくべきだと感じた。
- ・自分達も支援や啓発に関わることができるという自信につながった。
- ・虐待のサインを知ることができた。

- ・今回出会った児童達は虐待を受けていないと信じたいが、これからはより虐待のシグナルに注意しようと思う。
- ・自分が今回勉強したことを、たくさんの人に伝えていくことで、虐待を防止することにつながると感じたので、伝えていきたいと思った。
- ・改めて虐待の深刻さを知ることが出来た。近隣でも、もしかしたら虐待しているかもしれないと思うと、普段から虐待のことを考えていかないとだめだと分かった。
- ・今まで虐待は自分にはあまり関係がないと思っていたが、自分の身近にも虐待があることを感じた。
- ・児童虐待が意外と身近に存在していることに驚いた。
- ・自らが学ぶだけでなく、多くの方に知って頂くことの必要性を感じた。
- ・学生によるオレンジリボン運動は、実践する学生の学びに大いに貢献することがわかった。
- ・虐待をされる方も見ている方も悲しい。虐待をなくすために私たちができることを考えていくべきだと思う。
- ・これから子どもを産み育てる世代への啓発が必要なことが分かった。
- ・父親の育児不参加、疾病やストレスが原因になることも学んだ。
- ・幼児だけでなく学童期にある子どもも多く虐待を受けていることを知った。
- ・児童虐待はあってはならないし、私たち自身が環境を作っていく必要があると思った。
- ・運動に取り組むことで「虐待はしてはいけないという思い」が広がっていくことを実感した。
- ・講義で学んだことを、自分たちだけでとどめるのではなく、様々な人や場所へ発信していくことが大切だと感じた。
- ・それぞれが、児童虐待について考える機会をもつことの大切さを感じた。
- ・児童虐待について関心が薄かったが、オレンジリボン運動を行ったことにより、児童虐待や児童福祉について関心を持つようになり、ボランティアに参加した。
- ・自分を含め自分の周囲の人間が、児童虐待問題の今後の対策等について真剣に考えるようになった。
- ・子どもはみんなで守っていくものだという認識が強まった。
- ・子どもの明るい未来のために頑張っていこうと強く実感した。
- ・一人ひとりの子どもの個性が違っていいのだと思った。
- ・揺さぶりは危険ということを知った。
- ・産婦人科医による講義を通して、命の大切さをあらためて学んだ。
- ・多くの学生が、オレンジリボン運動に携わることによって、虐待に対する「無関心者（他人事）」から「関心のある者（活動者）」へと変貌したところがある。
- ・親子連れの出場者と学生が交流する機会として有効であった
- ・DVD観賞で子どものケアや里親などに関心を持った。

- ・児童養護施設のイメージが、暗いものではなく明るいイメージに変化した。
- ・サークル全体の児童福祉への興味・関心の高まりが見られた。
- ・小さな活動の輪の広がりを実感する機会となった。後輩がこの運動を継続できる仕組みを残していきたい。
- ・昨年度からの取り組みということもあり、学生の取り組みが前向きであった。
- ・今まで子育てのイメージは自分が育ってきた家庭から作られていたものであったと気づかされた。
- ・児童虐待について学んでいく中で、子どもの頃から当たり前を受けていたしつけは虐待だったのかなと思う。
- ・少しではあるが、オレンジリボンに関して啓発活動への協力ができ、学生の理解・周知も実施前より深まったと思う。

A. 意識の変化、感想等 — 認知度について

- ・児童虐待について、もっと多くの人に知ってもらう必要があると感じた。
- ・予想より学生の児童虐待に関する認知度が低く、他人事だと思っている人が多かったことに気付いた。
- ・もっと若い人が知るべきだと思った。
- ・児童虐待は他人事だと思っている人がとても多いと感じた。
- ・日頃から、こうした取り組みをいろいろな場所で行うことも大切であると感じた。
- ・虐待についてのマイナス意識が強すぎるために、虐待防止のための運動が広く浸透していかない可能性があると感じた。
- ・児童虐待について関心があまりない人、身近にもあることを認知していない人が、まだまだたくさんいると思う。
- ・アンケートを作って実施したことで、児童虐待について一般の人々の意識がばらばらであることを知った。
- ・アンケート結果より、オレンジリボンは乳がんやエイズのリボンに比べ、認知度が低いことがわかった。
- ・学生によるオレンジリボン活動を実施して、オレンジリボンに関する認知度の低さを改めて痛感した。
- ・この活動を実施することで、生徒・教員の方にも児童虐待の関心が深まったと感じた。
- ・児童虐待問題は身近な問題として、もっと多くの人に知ってもらうべきだと感じた。
- ・ネグレクト(育児放棄)の意味を知らない人が多いと感じた。
- ・昨年度に比較して知名度が格段に向上していると感じた。
- ・親や子どもだけでなく幅広い年代層に興味をもってもらえた。
- ・児童虐待という言葉に嫌悪感を抱く方もいることを発見した。
- ・保育・福祉関係ではオレンジリボンについて知る機会がある反面、他の分野では学ん

だ ことのない人たちには知られていないと感じた。

A. 意識の変化、感想等 – 視点について

- ・児童虐待防止を世の中に広めていくだけではなく、今現在の児童虐待の状況に目を向けていく必要があると感じた。
- ・予防がとても重要であることがわかった。
- ・虐待という問題の難しさ、根底にある問題（社会的問題、金銭的問題、養育者のメンタルヘルス等）の深さを改めて感じた。
- ・いつでも相談に乗るという姿勢が大切であると思う。
- ・児童虐待という望ましくない状況に対し、悲観するだけでなく、未来に向けて思考することが、児童虐待防止の啓発に効果的であることに気づいた。
- ・併設の中学校・高校への働きかけも進めたいなど活動の拡大に意欲がでてきた。
- ・参加学生の多くが、自分自身も児童虐待防止に関する意識が高まったと認識、また、学生主体の活動が多くの方々の共感を得たことに手ごたえと達成感を感じたようである。
- ・メディアで報道されづらいような虐待も多く行われていると知った。
- ・子ども虐待のない世界、それが理想で目標とすべきところであるけれど、人の意識を変えることの大変さを改めて感じた。
- ・自分たちで出来る子育て支援について検討するようになった。
- ・子どもたちとワークショップをして、より児童虐待への啓発について関心が芽生えた。

A. 意識の変化、感想等 – 将来の仕事の関連について

- ・今後、社会福祉現場実習等に出向く学生にとって、運動を通じて関心、理解を広める機会になった。
- ・社会福祉士としての関わり方を考えるきっかけとなった。
- ・自分の勉強している心理から何が出来るか考えるようになった。
- ・保育者になってから、虐待を受けている子どもや悩みを抱えている子どもに対して、気持ちを理解したり、言葉をかけてあげるなど、どんなことができるのかを考えるようになった。
- ・親のしんどさに寄り添える保育者になりたいと思った。
- ・保育者を目指す者として、啓発活動を行う自覚と意識が芽生えた。
- ・保育士として虐待防止に向けたアプローチの方法が理解できた。
- ・保育士を目指す学生は、児童虐待に関する意識が高まった。
- ・保育者を目指すものとして、意識が高まった。
- ・子どもの発してくれるサインに、気づけるような保育士になりたいと強く思った。
- ・授業で学ぶだけでなく、啓発活動を行うことによって、他人事ではなく、保育者としての自覚をしっかりと持つことができた。

- ・幼児教育に関わる私達ができることは何か、あらためて考える機会となった。
- ・保育士・幼稚園教諭を目指す者にとって、「虐待」は知っておくべき知識ではあるけれど、「ありえない」「信じがたい」「想像がつかない」などの感情があると、認識することが難しくなると感じている。
- ・教員や保育者として必要な知識を得ることができた。
- ・助産師は子どもを産み育てる女性を援助する立場にあるので、今後も児童虐待予防に積極的に関わっていくべきだと感じた。
- ・助産師として、良好な家族関係が構築できるよう、妊娠期からのかかわりが大切であることを改めて感じた。
- ・助産師として、子育てしている方やこれから親になっていく人たちに活動を広めていく必要があると感じた。
- ・文献研究から看護師の子ども虐待への関心や知識はまだ十分ではないことがわかった。
- ・将来、児童に関する仕事につきたいと考えているので、オレンジリボン運動がこれからもっと多くの人に知ってもらえるお手伝いをしたい。
- ・保育者を目指す私たちには「虐待防止に関する情報・意識」が深まり、社会的弱者や子どもの人権を守るという姿勢を新たにすることができた。
- ・ソーシャルワーカーとして社会的課題に取り組む意義やその重要性を理解した学生が多い。
- ・保育士を目指す学生（彼らも若者）が実際に取り組んでみたことの成果が非常に大きかった。
- ・保育士になる立場として、子ども達一人ひとりに目を向け、子どもや親の状況をきちんと理解する必要があると思う。
- ・これから助産師として妊娠期や育児期にかけて母子と密接に関わることになる助産師学生がこの運動に携わるとで、その責任を再確認したのではないかと思う。
- ・社会福祉士養成教育に携わる機関として、来場者への啓発にもつながり、本学科の地域貢献にも役立てることができた。
- ・将来、児童福祉施設（保育所、児童養護施設、情短施設など）に勤務を希望しているため、よい機会となった。
- ・「虐待」は就職した際に遭遇する可能性のあるものという認識であったが、自分自身、自分の友だち、知り合いも親となった場合に虐待をする立場になり得るということを知った。
- ・地域でのふれあい祭で広報啓発を行うことで、幅広い年齢層の方々にオレンジリボン運動を行うこととなり、地域の方々の見守りが児童虐待を予防することにつながるなど、広い視野で児童虐待問題を捉える機会になった。
- ・保育士研修会の講演後にオレンジリボンとメッセージカードを配布した。

A. 意識の変化、感想等 – 保護者、支援について

- ・保護者の方々の児童虐待に対する認知度が低いように感じた。
- ・虐待はどんな親でもちょっとした要因が重なれば起こりうることであり、ということに改めて強く感じた。
- ・アンケートの結果で、子育て経験のある母親の3分の1ぐらいが、「暴力をふるうかもれないと思ったことがある」と答えていて、とても身近に起きている問題だということを実感した。また、取組の重要性を感じた。
- ・虐待の種類や躰と虐待の境界線に関しては理解が曖昧で、「自分が子どもに対して行っている行為が虐待か躰かわからない」という意見もあり、虐待の内容についても理解してもらえた。
- ・お孫さんのおられる方が「私のしつけがマルトリートメントになっていないかしら」と話しかけてくれた。悩みながら子育てしている方が多くいることを感じた。
- ・虐待されている児童だけでなく、親も悩みを抱えているということがわかった。
- ・虐待はする側の問題だと思っていたが、する側にもいろいろな背景があることが分かった。深い愛情からも虐待につながる可能性があること、孤独から始まる虐待があることを初めて知った。
- ・虐待は親だけの問題でないということが分かった。
- ・親ばかりではなく、とりまく環境にも問題があることを知った。
- ・虐待の背景には周囲の無関心も関係していることを知り、虐待は親だけの責任ではないと感じた。
- ・児童虐待は被害者である児童のみを支援すればよいのではなく、加害者である保護者への支援も同様に必要であることを知った。
- ・子どもだけの支援ではなく、親への支援も欠かせないことを実感した。
- ・保護者の方や家庭の支援も大切にしなければならないと思った。
- ・保護者に対して子育てや虐待についての不安を減らしていきたい。
- ・母親の育児不安が大きな原因であるため、育児不安の軽減が必要。
- ・子育てで悩む親を助けないと児童虐待は減らなないと感じた。
- ・虐待の連鎖等について恐怖感をもった。
- ・なぜ虐待が起きるのか、親にとってどのようなことが大変だったのか、ということの理由を深く追求することで、改善法を考えるようになった。
- ・子育て＝女性がするものというジェンダーに関する問題があると感じた。
- ・男性の育児参加の必要性がアンケートからわかった。
- ・児童虐待は起こってから対策するのではなく日常の子育て支援が重要だと感じた。また、虐待に繋がってしまう恐れも身近にたくさん潜んでいるとも感じた。
- ・子育て支援の役割や大切さを感じた。
- ・子育てに関する悩みを相談できるようにしなければならない。

- ・常に SOS に応えられるような環境を整え、「身近な子育て応援活動」の重要性を広めていかなければいけないと思った。
- ・不安や悩みを抱えている人の心のわだかまりを少しでも減らすことができたなら、苦しむ大人も子どもも少なくなると思う。
- ・許せないものだが、虐待をしてしまう親の支援も必要だと感じた。
- ・少しでも知識があれば防ぐことの出来る虐待があるが、その情報や場は静的で養育者自らが動かなければ得ることが難しい。
- ・街中で親子に気をかけるようになった。他人事ではないと思った。もっと多くの人に発信していかないといけないと思った。

A. 意識の変化、感想等 — 地域社会との関係について

- ・専門職だけでなく、地域住民にも呼びかける必要があることを知った。
- ・虐待を防止するために、地域の人々の協力も大切だと改めて感じた。
- ・虐待する親の問題だと考えていたが、社会や地域で取り組むことで予防できる。
- ・住民の生の声を聴くことができて良かった。
- ・地域社会で、子どもたちを見守ることの大切さを感じた。
- ・見守りの重要性を伝える事ができ、関心を高めることができた。
- ・地域で協力すべきと改めて思った。
- ・虐待防止のためにも地域住民と関わりを持つことの必要性を感じた。
- ・子を持つ親や家族だけの問題でなく、地域や社会規模で解決しなければならない。
- ・地域での子育て支援が必要。
- ・地域全体で虐待が深刻化する前に早期発見・早期対応のできるシステムをつくることが大切だと思った。
- ・社会全体で考えていく必要があると感じるようになった。
- ・周囲の支えが必要だということを痛感した。
- ・周囲の人間が強く関心を持つ事の意味の大きさを知った。
- ・社会全体の問題として、幅広い世代の人々にこの問題を知ってもらい予防に努める必要がある。
- ・家庭だけでなく地域ぐるみで子どもを守ることが大切であり、誰もが相談窓口や支援制度を理解する必要がある。

A. 意識の変化、感想等 — 施設について

- ・日常的に活動して交流している児童養護施設児童への関心が高まった。
- ・児童虐待を身近な問題として捉えることができるようになり、関心が深まった。また、実習先として児童養護施設を希望する学生が増えた。
- ・施設等でも虐待があるということを知って、絶対に安全ではないと思った。

- ・児童養護施設等への見学等をさらに深めたいというニーズが出てきた。

A. 意識の変化、感想等 – その他

- ・「児童虐待」のリスクがある人に対しても、「オレンジリボン運動」としてならアプローチしやすい。
- ・他の学科の学生達もオレンジリボンを付けて、活動してくれた。
子ども虐待防止に関心の高い学生が学部学年を越えて学び合い交流することができた。
- ・今年度は、児童虐待防止全国ネットワークに学生部会を置くことになり、主体的に活動の在り方などを考えるように意識が向上している。
- ・活動をとおしてサークルへの加入者が増えている。昨年度 20 名、今年度 31 名。
- ・児童虐待に関する科目がまだ開講されていないため、オレンジリボン運動を実施することが勉強するきっかけとなった。
- ・人気アニメでストーリー作成のアイデアが出た。
- ・社会福祉に関心がある高校生が数名参加しており、福祉系大学進学を希望していた。

B. 若者への広報啓発の工夫

B. 若者への広報啓発の工夫 - 全般的な配慮

- ・ 学生等若いうちから子供に関わる経験をしておく必要があることを伝えた。
- ・ 「悪意」だけが虐待の原因ではなく、生真面目な人、優しい人、悩みを抱えやすい人等の性格でも、環境によって虐待をしてしまうということがあり、決して他人事ではないということを伝えられるよう心掛けた。
- ・ 児童虐待は決して他人事ではないということを強調した。
- ・ 子どもたちも一生懸命生きているということを伝えた。
- ・ 親だけが悪いのではないということを伝えた。
- ・ 分かりやすい言葉で説明した。
- ・ 被虐待経験をもつ者もおり、広報・啓発の際にネガティブメッセージに偏らない配慮が必要であった。
- ・ 虐待を受けている可能性もあるので、暴力的なイメージが強いような表現は避けた。
- ・ 実際に虐待を受けている、受けていた人も中にはいるということを配慮し、暴力的表現は控え、明るい構成にした。
- ・ 学生の中にも虐待の加害者（心的も含め）がいる可能性があることを意識した。
- ・ 学生会で対応することにより、全学生にオレンジリボンについての親近感を持たせることができた。
- ・ 内容は重たいけれど、明るく元気に声掛けをした。
- ・ みんなでグループ学習をすることで楽しく取り組めるようにした。
- ・ 学園祭にて実施する際、少し開放的な空間で立ち入りやすい環境作りを心がけた。
- ・ 文化祭に来校した、若年者にこちらから声をかけて、オレンジリボンを渡した。
- ・ オレンジリボンを自分達で作成したが、安全ピンではなかなか衣服につけたりしないと思ったので、携帯ストラップ式にした。
- ・ リボンを作成するにあたって、両面テープと安全ピンとに分け、子どもに怪我がないように配慮した。
- ・ コバトンをあらゆる箇所に引用するなど、展示物をかわいらしく親しみがあるように作成した。
- ・ 集団（グループ）で来場している者たちは、オレンジリボンを受け取ると嬉しそうにその場で服につける者が多く、アプローチしやすかった。
- ・ ほっとできる喫茶コーナーを設け、子ども達のためのゲームを用意した
- ・ 街頭啓発活動、保育園へウェットティッシュ+メッセージカードを持参し、配布を託す。
- ・ 附属幼稚園・高校へポスター・リーフレット等の掲示と配布を行う。

B. 若者への広報啓発の工夫 - 保護者・子どもへの配慮

- ・家族連れに声をかけた。
- ・親子連れの方にはエコバックにも使ってもらえるように、布製のバックにリボンをつけ、中にパンフレットも入れて渡したところ、みんなに受け取ってもらえた。
- ・親子でコミュニケーションが図れるような活動（遊び）を取り入れた。
- ・大学祭内の子ども広場にきた親子に様々な遊び（的当て、新聞紙を使ったおもちゃづくり、紙芝居等）を提供し、親子で一緒に楽しんでもらうことを主体に活動を行った。
- ・子どもたちと一緒にワークショップと綿あめ作りを行い、子ども、保護者へ児童虐待防止を訴えた。
- ・子連れの場合は学生が子どもと遊んでいる間に別の学生が説明するようにした。
- ・折り紙やバルーンアートコーナーを一緒に設けて、親子が気軽に立ち寄れる雰囲気を作った。
- ・折り紙コーナーで、手作業をしながら、学生が来場者とくつろぎながら歓談することができた。
- ・単なる掲示だけでなく、幼児も遊べるようなスペースを併設すると、親子連れが来やすいようであった。
- ・お菓子の飴と一緒に渡して喜んでもらえるように工夫した。
- ・子どもが来た際に遊べるよう輪投げゲームを行った。
- ・子どもの遊び場スペースを設けた。
- ・参加した子どもも楽しめるように、学生が手伝いながら折り紙でメダルをつくった。
- ・折り紙を貼ったりして堅苦しくないようにした。
- ・折り紙コーナーを設け、子ども連れの親子が楽しめるようにした。
- ・こどもが参加しやすいように、こどもが遊べるコーナーやスタンプラリーの設置を行った。
- ・風船の配布やオレンジリボン作成など、身近に虐待啓発に関われるようにした。子どもが遊べるスペースを用意したことで、楽しそうな企画と思えるようになり、入りやすい環境になっていたと思う。
- ・小学生には缶バッジを配布し、興味付けを行った
- ・子どもたちや、子ども連れの親に来てもらえるよう、絵本を配置したり、飴のつかみ取り企画を実施したりした。
- ・小さい子どもにはオレンジ色の風船やラムネを手渡すようにした。
- ・小学生などのこどもたちにも来てもらえるように、学生がダンボールでダンボールハウスを作り、遊べるコーナーを設けた。
- ・小学生以下の子ども達とは、一緒に「お話し」をしながら工作をし、その「お話し」の中で「オレンジリボン」というものを知ってもらえるようにした。
- ・小学生に対しては、絵本などを活用し、理解できる範囲を考えて啓発活動した。

- ・プレゼント効果を利用して活動を行った。
- ・絵本コーナーを設け、子どもたちも集まれるようにした。
- ・小さい子どもでも興味をもてるようにかわいいシール等を用意した。
- ・子どもが楽しみながらオレンジリボンに興味をもってもらえるように、好きなシールを選んで貼って作る、オレンジリボンカンバッジのコーナーをつくった。
- ・小学生を対象に、暴力行為防止に関連する（いじめ）絵本の読み聞かせを行う。
- ・中高生にも興味をもってもらえるようなキャッチフレーズに苦心した。
- ・中高生が参加しやすいように、声かけを行った。
- ・高校での模擬講義において、オレンジリボン運動を分かりやすい言葉で説明し、児童虐待の予防等につながるように努めた。
- ・高校生・大学生の両方でオレンジリボンの作成、それを使ったパネルの作成をすることに、より興味を持ってもらうようにした。
- ・中学生・高学年以上には、自分も虐待を絶対にしないとは限らないということを知ってもらえるようにした。
- ・恥ずかしがっている中学生にはこちらから声かけを行い、何人かのグループでお母さんや赤ちゃんと触れあえるように配慮した。
- ・学園祭において若年者を集客する目的でハンドアロママッサージをした。

B. 若者への広報啓発の工夫 － 施設関係

- ・大学の近くにある児童養護施設やファミリーホームの子どもと職員を学園祭に招待し、室内ゲーム、工作、ドッチボール、模擬店で買い物など楽しんでもらった。
- ・児童養護施設の高校生に対し、児童養護施設出身の卒業生や現役の大学生が「体験談」を話し、高校生のエンパワーメントを図ることができた。
- ・大学周辺にある複数の児童養護施設を訪問し、職員、子ども達と交流。

B. 若者への広報啓発の工夫 － 工夫全般

- ・大学でオレンジリボン運動に関する校内放送を行った。
- ・大学祭で運動を実施することにより、比較的若年層に広報活動を行うことができた。
- ・オレンジリボン作成コーナーを設置した。
- ・視覚的に訴えるため、大きなオレンジリボン造形物や、手作りポスターの作成・展示を行った。
- ・身近な問題であることが伝わるように、また読みやすいようにリーフレットのレイアウトを検討した。
- ・リボンだけでは受け取ってもらえないと思い、ミサンガを作成した。
- ・展示コーナーでは折り紙や風船などのアイテムを使い、親しみやすくした。
- ・難しい用語をできるだけ使わないようにした。

- ・わかりやすく伝えるために言葉の表現に注意をした。
- ・親しみやすさを考え、出店で食べ物と一緒に配布し、説明した。
- ・わかりやすくイラストを描いた。
- ・オレンジリボン作成、啓発パネルの作成をした。
- ・手書きのイラストでメッセージカードを作成した。
- ・紙芝居をつくってオレンジリボン運動を説明した
- ・明るく積極的にことばを掛けた。
- ・ポスターにゆるキャラを用いて幅広い年齢層に受け入れられるように工夫した。
- ・他の企画の学生や教授、マスコットキャラクターにも配ってつけてもらい、校内への広報・啓発もした。
- ・PR誘導担当学生が、大学祭会場内の友人や知人に声を掛け、多くの若者が啓発展示室に入場することができた。
- ・今回工夫できなかったのだが、掲示ポスターに振り仮名をすればよかったと思った。
- ・授業で子ども虐待に関する内容を調べ、その内容を写真やイラスト等をまじえて紹介して、来場者の興味を引くよう工夫した。
- ・キャンディレイを作った。
- ・理解しやすい言葉や表現方法を用いた。
- ・学園祭の場で、虐待に関する漫画などを置いた。
- ・発表に関しては、劇を用いて場面が想像できるよう工夫をした。
- ・オレンジリボンにちなんで、オレンジ色の着ぐるみを着て、注目してもらおう工夫をした。
- ・若者の興味を引く可愛いカードにオレンジリボンの紹介を書いて配布した。
- ・親になることや子をもつことのイメージを膨らませるように、赤ちゃん人形を使い、おむつ替えや抱っこの仕方など具体的に説明した。
- ・オレンジリボンを大切な人に説明して渡す（母、恋人、友人、きょうだい、祖母、障害施設の職員、幼稚園教諭など）。
- ・近隣高校十数校へ学園際の案内をする。高校生・大学生混合グループでオレンジリボンを作成し、啓発パネルを作成し高校に持って帰ってもらう。

C. 創意工夫した取組

C. 創意工夫した取組 – 全般

- ・ 民生・児童委員、主任児童委員の方に、実際の虐待対応や虐待背景等を伺い、メディアで報道されないような生の声を伝えられるようにした。
- ・ 自分達で企画するだけでなく、実際に行われている活動に参加したことで、学生自身の意見に偏ることなく多面的な情報を提供できるようにした。
- ・ 妊婦と夫へ、「妊娠・出産・育児期」についての集団指導直後に、オレンジリボン運動を説明したので関心が高かったと思われる。
- ・ 未だ虐待は特定の人が行うもので、一般的には関係がないといった感覚を崩すために、事例や映像などを使って説明をした。
- ・ 悩みを抱えたら、すぐに相談できる場所があるということをメッセージに込めた。
- ・ 呼びかける対象者を考える。イラストやメッセージは、誰もがとても快いと思えるものを考えた。
- ・ キッズプレイルームの横で、オレンジリボン啓発の為の展示室を開設し、学生が作成したオリジナル展示物を啓発展示し、地域の保護者の方や親子に観覧してもらった。
- ・ アンケートを来場者に実施し、参加型にして興味を持ってもらうように工夫した。
- ・ 喫茶コーナーを設けてリラックスした状況で、関心をもってもらうようにした。
- ・ 学校生徒全員が参加できるようクラスから実行委員を選出し、活動内容をクラスに伝えた。
- ・ 留学生の方々にも、オレンジリボンを渡しながら英語で説明した。難しかったが、伝わって良かった。
- ・ 理事長、学長をはじめ学内の教職員に協力してもらい、活動期間中リボンをつけてもらうようにした。
- ・ 学生、教職員が一体となり、学園全体で取り組み、一体感を感じた。
- ・ オレンジリボンを作るときに実行委員だけではなく、一般の学生にも協力を要請した。
- ・ 学園祭期間中に開催される同窓会においてオレンジリボン配布運動を行った。
- ・ 11月のスクールバスの看板は、児童虐待防止オレンジリボン運動にした。
- ・ 子ども虐待や子ども家庭福祉に関する手作り絵本の制作、展示した。
- ・ 子ども虐待についてのビデオを上映する（「小学生のための人権」、「ゴースル」など）。
- ・ 大学の愛称にかけたキャッチコピーを考案しアピールした。
- ・ 目立つようにお揃いのオレンジ T シャツを作成し、着用して配布した。
- ・ 学部祭で学生ユニフォーム（T シャツ）にオレンジリボンをつける
- ・ オレンジリボンの T シャツやウインドブレーカーを着て呼びかけを行った。
- ・ 学生会、サークル、先生など、学内の多くの人たちと協力し、できるだけ広がりをもった運動になるようにした。

- ・他学年にも趣旨説明を行い、学園祭当日は学科全員でリボンをつけるようにした。
- ・学習会を何度か行い「オレンジリボン運動」の理解を深めた。
- ・学園祭のパンフレットにも児童虐待防止を盛り込み、模擬店、展示の宣伝と共に読んでもらえるようにした。
- ・学園祭来場者自身にオレンジリボンを作成してもらい、あわせて児童虐待防止に向けてメッセージを書いてもらった。
- ・来場者に子育てにかかわる願いを込めたメッセージをカードに記入いただき、それらを樹に貼り付けて花を咲かせる制作活動を行った。
- ・学生間で学習会を実施し、意見交換を行った。
- ・展示資料を読むと正解できる賞品付きのクイズを実施した。
- ・オリジナルポスターを作成した。
- ・オレンジ色のジャンパーを着用し、プラカードを持つなど、視覚的な PR も心がけた。
- ・可能な限り、自作したりボンを配布し活動を知ってもらおう努力を行った。
- ・メッセージツリーを作成し、展示及びメッセージをお願いした。
- ・大きなツリーを設置しオレンジリボンで飾り、関心を持っていただけるように心がけた。
- ・ニュースなどを録画して「映像」を流し、関心をひくようにした。
- ・手話歌で表現する「愛」のメッセージがオレンジリボン運動にもつながった。
- ・「オレンジリボンコンサート」を開催する（コンサートには地元の音楽家、学生が出演）。冒頭で本キャンペーンの趣旨説明、児童虐待等について説明する。入り口で啓発チラシ配布、出演者がオレンジリボンを胸につけて啓発を行う。
- ・外部講師を招き児童虐待に関する基礎知識や現状・実態について学べる機会をもうけた。
- ・乳児院スタッフによる学生向け赤ちゃんの抱き方の学習を行う。
- ・社会的養護についての学習を行う。
- ・授業で事前学習をするだけでなく、外部の児童福祉施設職員、臨床心理士を目指す大学院生（本学 OG）の話聞く。
- ・授業内で虐待に関する絵本を作成した。
- ・司法書士、弁護士会に派遣依頼で講義をお願いする
- ・保護者(主に母親)の置かれている環境についても調べた。
- ・父親の長時間労働についても調べ子育て時間の短さや子どもへの関わり方等についても調べた。
- ・卒業研究のテーマの一つとして児童虐待に取組み、実態把握のために、子育て支援センター、県警少年課、県こども家庭課、県子ども・女性・障害者支援センター等の関係機関に出向いて情報収集を行う。
- ・映画「うまれる」、「隣る人」の鑑賞を行う。

- ・クイズラリー形式で来場者にオレンジリボン運動についての啓発活動を実施した。
- ・来場者と共に具体的に児童虐待を考えるためにパワーポイントの作成と、3つのストーリーの脚本を作成し撮影を行う。
- ・児童虐待をテーマにした映画の上映とミニトークショーを行う。
- ・児童虐待防止に対する思いをメッセージカードに書いてもらい（大学生、地域住民、高齢者、障害を持っている方、大学教職員に書いてもらい）、メッセージツリーを作成する。
- ・両親学級にて、「妊娠・分娩・産後の育児」に関する保健指導実施後に、「オレンジリボン運動」を説明し、オレンジリボンとチラシを配布した。
- ・実習施設へオレンジリボン運動を紹介し、産科外来にチラシとシオリを常置してもらう。

C. 創意工夫した取組 － 連携

- ・学内だけではなく、地域と連携した。
- ・オレンジリボンたすきリレーで広報活動に参加した。また、NPO の市民集会に参加した。
- ・市のこども家庭相談課と共同で、オレンジリボンを作成し、街頭配布した。今年の配布は学生、市役所職員に加え社会福祉協議会の会員も一緒に行った。
- ・区長・教育長・児童相談所職員等とともに、児童虐待防止普及啓発のための「オレンジリボンキャンペーン」に、学生が参加した。
- ・学園祭での児童虐待防止シンポジウムについて、関係団体とタイアップして実施した。
- ・市の子育て支援課に作ったオレンジリボンを贈呈した。
- ・保健所と一貫して共同で取り組んだ。
- ・児童虐待の専門の先生に教材も借りていろいろ相談した。
- ・近隣の商店街活性化事業に大学が参加し、来場者に児童虐待防止のチラシ・オレンジリボンを配布し、児童虐待防止の啓発を行った。

C. 創意工夫した取組 － ソーシャルネットワーク、報道等

- ・オレンジリボン運動実施終了後に学生の感想を学科ブログに掲載した。
- ・大学の HP で活動内容を載せた。
- ・大学の公式フェイスブックで実行委員会の報告を行った。
- ・SNS を活用している人が多いので、ツイッター、フェイスブックを活用し広報活動をした。
- ・オレンジリボン+しおり(QR コードをつけたものを配る)
- ・Line を利用し、サークル構成員以外の学生にも協力してもらった。
- ・児童虐待防止キャンペーン、オレンジリボン運動の取り組みについて、学園祭での企

画についてマスコミ（複数の地元新聞）で事前広報してもらった。

- 地元新聞社や学内広報誌に協力をお願いした。
- 地元新聞より、当日の取材がありオレンジリボンの取り組みについて取り上げてもらった。
- TV ニュースの番組に取材を依頼した。
- マスコミにプレスリリースし、学園祭当日はテレビ局が撮影に来て、後日テレビ放映された。